

おはようございます。受験生のみなさん、ご苦勞様です。教育本部専門委員の中田修と申します。これから約30分間、お昼前の最後の講義として「環境変化とスキー指導」についてパワーポイントを使いながらお話をさせていただきます。よろしくお祈りいたします。

私は横浜生まれ、横浜育ち、横浜市内に勤務しています。仕事は高校の教員です。「体育の先生ですか？」とよく聞かれますが「物理の先生です」と答えると「私、物理は苦手だったんですよえ」と10人中11人くらいが答えてくれます。しばらく話すうちに「やっぱり理科の先生って感じだなあ」といわれることも多いです。今日もしかすると居眠りを見つけていつものように怒鳴ってしまうことがあるかもしれませんが、ご容赦ください。

さて、これからお話しさせていただく内容ですが、「スキースポーツの環境」「スキースポーツの特性」「SAJ」の活動」という3つの項目について進めさせていただきます。「教程」と「誘い」の中からお話をさせていただきます。「誘い」は今年改訂になっていますので、旧版の方はどうぞ入手してください。

ではさっそく「スキースポーツの環境」についてお話しさせていただきます。教程のpart 1を中心に進めさせていただきます。

皆さんがスキーを始められた頃、ゲレンデはどんな様子だったでしょうか。ちょっと思い出してみてください。私がスキーにのめり込んだ時期はちょうど「私をスキーにつれてって」の時代、世はパプルの絶頂期でした。そのころは、私も含めて多くのスキーヤーが閉脚のパラレルターンやコブのウェーデルンに憧れていました。

もちろんレジャースキーヤーもいましたが、言ってみれば遊びとスキーが区別されていて、スキークラブやスキースクールに指導を受けられる方々は、誰もが同じ目標を持っていたのではないかと思います。もしかすると、持たされていたという言い方の方が正しいのかもしれませんが、指導者がそのような指導をしていたのかもしれないからです。

また、つい最近、今度は誰もがカービングターンを目指して大回りをしていた時期がありました。洗練された大回りとしてカービングターンがもてはやされていた時期です。

しかし、今のスキーヤーが指導者に求めていることは決して一つではありません。それはエレガントなスキーであったり力強いスキーであったり、巧みなスキーや楽なスキー、そして子供のスキーや歩くスキーに至るまで多岐にわたります。スキーの技術革新や社会的情勢によって、スキーの楽しみ方は多種多様になり、多くの人が自分のスタイルを持ってスキーを楽しんでいます。

この多様なスキーヤーに私たち指導者が対応することが、スキー界の発展につながることはみなさんもよくおわかりのことと思います。年に1・2回しか滑らないスキーヤーにどんな楽しみを提供できるのか。あるいは楽なスキーとはどんなスキーなのか。新しい技術とはどんなものなのか。それぞれの目的にあったプログラムをどのように用意できるのか、指導者の力量となりつつあります。画一的な指導では多様なニーズには応えられません。したがって、「指導は生き物」と言う言葉に象徴されるように、指導法は進化し続けなければいけません。それがスキーヤーの増加、身近な例で言えば、スキークラブへの加入・スキースクールへの参加などに結びついてゆくのではないのでしょうか。

さて、この数年間で、スキーに対する大きな変化が現れてきました。これは以前から教程にも示されていましたが、3つの要素つまり「場の変化」「物の変化」「人の変化」です。ピستنによるゲレンデ整備・高速リフトの設置などの「場の変化」、カービングスキーをはじめとしたスキー用具の性能の進歩、すなわち「物の変化」そしてスキーヤーの欲求や価値観の多様化といった「人の変化」これらの変化が急速に進み、指導の方向性がずいぶんと変わってきました。

これらに加えて、近年情報化に対応した指導も考えあわせなければいけなくなりました。特にインターネットの普及は様々な情報を素早く大量に入手できるようになりました。みなさんも情報入手の方法としてインターネットを活用されている方も多いと思います。ゲレンデの雪の状態・流行のアイテム・選手の動向・宿の確保・ゲレンデ食堂の善し悪しまで様々な情報が流れています。全日本スキー連盟・神奈川県スキー連盟でもホームページから多くの情報が発信されています。もちろん一般のスキーヤーも同じ情報を入手しているわけですが、指導者としてはこれらの情報にどのようにつながりが必要なのでしょうか。ここでは指導者としての情報の知識化が必要とされています。流されている情報を取り込み、蓄積し、そして発信する必要があります。しかしその際には情報を単に流すのではなく、情報は思考の材料として利用し、ニーズにあった情報を指導者としての的確に流す必要も生まれています。情報を受け取るだけではなく、知識として蓄積し問題解決のため積極的に知識発信をすることが指導者に求められているのです。言ってみれば、言葉よく謎多き指導者であるより、積極的にスキーヤーに相対する指導者が求められているのではないのでしょうか。

このような環境の中にあるスキースポーツですが、このスキースポーツの特性について理解を進めなければ多様な情報化に対応することはできません。次にスキースポーツの特性について進めることにします。引き続き教程のpart 1をご覧ください。

スキースポーツの特性として大きなふたつの項目が取り上げられます。まず、スキーは大自然の中でプレイするスポーツであるということです。自然が相手と言うことは、均一な条件で行われることが少なく、臨機応変な対応をしなければいけないスポーツであるということです。天候・雪質・斜度・雪面状況など一つ一つの要素は常に変化をします。皆さんの中にも天候の急変や雪質の変化などに苦労したことも、あるいは思いがけない喜びを得たこともあるのではないのでしょうか。宿から見ると深々と降り雪。よし明日は朝一番にゲレンデに行って新雪を滑るぞ！と行ってみると、雪崩の危険からゲレンデが閉鎖になっていた、などと言うことも私自身ありました。ああ、目の前にはせっかくの新雪なのに！とは思いますが、しかし、指導者として、自然の大きな力の元に行われるスポーツであることも決して忘れてはいけません。人間の力ではどうにもならない条件があることも認める必要があります。

もう一つの特性として、生涯スポーツとして、ライフスタイル・ライフステージにとらわれることなく楽しめるスポーツであることもあげたいと思います。皆さんの周りを見回してください。そもそもこうして養成講習会を受けていらっしゃる皆さんの年代も生活様式も様々です。そして皆さんと共に滑られるスキーヤーの方々の年代も生活様式も様々です。もちろん、老若男女、皆が同じ滑り方で同じ楽しみを持つのはいろいろな意味で難しい点があります。しかし、適した方法を伝えれば、どの方々にとってもスキーは楽しいスポーツになり得ます。ということは、つまり指導者がその適した方法を提供することによって、それぞれがスキーの楽しみを知ることができる、これも大切な側面だと思えます。

さて、そのスキーの楽しみ・目的とは何でしょうか。

ここにお集まりの皆さんは自他共に認めるスキーフリークであろうと思います。スキーの楽しさ・面白さを十分に知り、それを他の人と共有したいと思って指導者を目指している方が多いのではないかと思います。やっぱりスキーは楽しいですよ。もしかすると、今こうして受験生となった皆さんは「そんなことはない苦しいスキーもある！」とやがて言いたくなるような場面もあるかもしれませんが、それでも、検定に合格したときにはきつと何か言葉にならない楽しみがやってくるのではないかと、希望を持ってこの場を望んでいます。それなら嬉しいですね。

そういったスキーの本質的な楽しさ・面白さを得る前の段階もありますよ。たとえば、何処々スキー場の何々コースを降りてこられたとか、深雪を転ばずに滑ったとか、あるいはフォームにこだわって滑ってみたり、一緒に滑る仲間より少しでも上達したいと思ったり。そういった様々な欲求が、スキーをする原動力になることも多いと思います。

さらには、誰々さんとスキーに行きたいとか、あこがれの先輩がいるとか、飲み仲間だとか、人間関係や仲間づくりが動機になることもあるでしょう。今やスキー仲間が友達がいなくなってしまったなどと言う人はいませんか？私もそうかもしれません。でも、その仲間が雪を離れても心通じ合う仲間になっている方も多いのではないのでしょうか。

スキースポーツはスキーの持つ本質的な楽しさ以外の様々な目的を提供することができます。つまり、様々な目的の実現の手段としてのスキーの存在を意識する必要が有ると考えます。もちろんスキーの本質に向かうような技術達成も一つの目的として考えられますが、たとえば人間関係をスキーに求めることも指導者として視野に入れなければいけない、と考えてください。仲間がいるからスキーをする、そういった目的が次第に様々な欲求を生み、技術を習得することによって、やがてスキーの持つ本質的な楽しさ、おもしろさへとつながって行くこともあると思います。ですから、スキー技術を教える・教わることをスキーの目的とはせず、楽しさを与えてくれる一つの手段であると、大きな視野を持って指導に当たれるようにしていただきたいと思ひます。

私も実は痛い経験があります。指導中につい熱が入ってしまいました。そのときの生徒さんから「私はそんな練習をしにスキー場に来ているわけではありませんから」といわれました。当時の私は頭に血が上ってしまい、こんなに一生懸命指導しているのになぜそんな言われ方をしなければいけないのかと思ひました。ですが、よく聞いてみれば、その生徒さんは友達と雪を楽しみに・雪国を楽しみに来ていたのです。そういう楽しみ方だってよいのだと思ひます。そして、雪国への関心の中で様々な体験を通してスキーへの関心も持ってもらえば良かったのだと思ひます。

ここでフリチョフ・ナンセンの言葉を引用しましょう。スキーへの誘い目次の次のページをご覧ください。この言葉はみなさんも様々なところで聞きになったことともいえます。この言葉はまさにスキーの特性を表していると思ひています。

「あらゆるスポーツの中で、その王者に値するスポーツは、スキーをおいてほかにない。スキーほど筋肉を鍛え、身体をしなやかに、しかも弾力的にし、巧緻性を養い、注意力を高め、意志力を強め、心と身体を爽快にするスポーツはほかにない。」

私自身も全くその通りに感じています。この爽快感が何物にも代え難く、遠い道のりと時間をかけてでもスキー場に連れてくるのではないかと思ひます。中段以降にさらに続けます。

「日常の文化生活はいっぺんにわれわれの頭から拭いさられ、汚れた空気もろとも、はるか後方かなたへ遠のいてしまふかのようである。われわれはスキーと、そして自然と、渾然としてひとつになってしまうのである。スキーは、身体を鍛えるばかりではなく、心も養い高めるものであり、多くの人が予感しているよりも、いっそう深い意義をもっているのである。」

このように、大自然のスポーツ・非日常性・そして身体面のみならず、精神的な高まりを持っているのがスキースポーツの特性です。そんな世界にみなさんが様々な方々を巻き込んでゆくような人間関係・仲間づくりを是非進めていただきたいと思ひます。

さて、実際に指導者として活動されることになると、ご承知のように私たちは全日本スキー連盟・SAJの一員として活動することになります。SAJの活動についてまとめることにします。誘いのpart 3・116ページをご覧ください。

SAJは文部科学省の認可団体として、スキー界を統括しています。SAJの活動分野にはふたつの柱があります。まず一つは競技本部を中心とした競技の世界です。オリンピック・世界選手権・ワールドカップなどの国際大会や国民体育大会・全日本選手権など様々な大会がありますが、これらの大会の運営はもちろん、参加する選手の育成や強化も行っていきます。もう一つの柱は教育本部を中心とした安全で楽しいスキーの普及・振興です。

この、教育本部の事業の窓口となるのがスキー学校や各種団体に所属している私たち指導者ということになります。したがって、私たち指導者が、一般スキーヤーはもとより、スキーとは距離のある方々をも含めてスキースポーツへと誘うことが一つの使命と考えても良いのではないかと思ひます。

さて、SAJの組織ですが、傘下には全国47都道府県のスキー連盟があります。もちろん沖縄県にもスキー連盟があります。さらにその下部には5500の所属団体、さらには皆さんが実際に活動されている数多くのスキー部・スキークラブがあります。これらをとりまとめているのがSAJです。会員数は12万人を数えています。

そして、先ほどお話ししたスキースポーツへの誘いのために、スキーヤー向けに、様々な事業を行っています。

まずは、スキーの日。ご存じですね、1月12日です。釈迦に説法だとは思ひますが、明治44年(1911年)のこの日、新潟県の高田、今の上越市で、オーストリアのレルヒ少佐がスキー指導を行いました。日本に初めて本格的にスキーが伝えられた日とされています。

それから、各種講習会・講演会を行っています。この養成講習会ももちろんSAJの事業のひとつです。また、スキー技術選手権大会やスキーサミットと言った専門的な行事を公開することによって、より多くの方に関心を持っていただくとしています。

皆さんお持ちの「スキーへの誘い」と言うこの冊子ですが、これもまた皆さんの教本であると共に、一般の方々へのスキーヤーのメッセージと捉えていただければ良いのではないのでしょうか。「こんな雪の世界に足を踏み入れてみたいなあ」と関心を持っていただくことが、私たちの活動の第一歩です。この本がスキーヤー以外の方の目に触れるように安価に配ったりすると、もしかしたらスキーヤーの増加につながるんじゃないかなあ、などと思うのは、私だけでしょいか。

さて、皆さんが受験してこられた級別テスト・並びに現在受験なさっている指導者検定という資格認定制度を持っていることも、SAJの指導体制の一つと考えることができます。ジュニアテスト・プライズテストなどを含めて技術的な進歩を全国一律の水準で実力を試すことができます。

また、指導者に対しては研鑽事業をSAJは様々な行っています。ここで指導者の任務と義務を唱える必要は、無いと思ひますが、指導者は理論研修会・雪上研修会を通して、資質を高めなければいけません。これら研修が義務であることは皆さんご承知の通りです。義務でなくしても、指導は生き物であるわけですから、停滞した知識では十分な指導ができないことは十分おわかりになるものと思ひます。こうした指導者の研鑽に向けて、教育本部では様々な指導体制を組んでいます。このような制度を確立している点もSAJの組織としての重要な活動です。

さて、最後になります。繰り返す部分もありますが、まとめて終わりたいと思ひます。

スキー指導をするにあたり大切なことは、皆さんが単なるスキー技術の伝達者となつてはならない点です。求められている楽しさ・面白さ・喜び・価値を意識し、指導活動の全体を構成・演出する必要があります。技術におぼれず、人と人とのつながりの中でスキーの楽しさを伝えていただければと思ひます。それがスキーの専門家として指導者が実践すべき行動であると思ひます。

私自身もまだまだこの目標に達したとは思ひません。このような私の話ではありましたが、皆さんの今後の活動の一助になれば幸いです。ありがとうございました。